

# 校庭芝生化の現状と課題

## The present condition and problem of turfing school playground

1K08B072-1 氏名 倉島 智志

指導教員 主査 中村 好男 先生 副査 木村 和彦 先生

### 【研究の動機】

我が国において、学校の校庭といわれてほとんどの人が思い浮かべるのは土のグラウンドだろう。しかし、種(2008)の「校庭芝生化の現状と今後の展開に関して」によれば、海外では芝生の校庭が当たり前であるという。現在わが国では、校庭を芝生化し、子供のスポーツや遊びを芝生の上で行えるようにしている学校や、文部科学省や地方自治体、NPO法人等それを支援する団体がある。しかし芝生化にはコストや維持管理、ソフトボールや野球等の芝生の校庭では支障をきたす競技との兼ね合い等のたくさんの課題があり、全公立小中学校の芝生化を宣言した東京都においても、その普及率は12%程度にとどまっている。今後芝生化を普及させていくためには課題の解決が求められる。そこで現在ある事例から、課題を明確にする。

### 【研究の目的】

本研究の目的は、校庭の芝生化を普及させるために、芝生化によって得られるメリットを明らかにするとともに、芝生化を阻害する要因、芝生化後の課題を明確にすることである。

### 【研究の方法】

文献研究により芝生化の推移や現状を明らかにする。校庭の芝生化の事例をコスト面、維持管理体制等の観点から比較する。

### 【研究のまとめ】

校庭の芝生化は、1970年代からのブームは一時のもので終わってしまい、当時芝生化した校庭のほとんどが失われてしまったが、1990年代後半からふたたび校庭を芝生化する学校が増え、支援活動も活発になってきた。校庭の芝生化には、砂塵の飛散防止、気温の調整、騒音の防止等の環境・健康保全上の効果や、運動・遊びの活性化と多様化、環境教育の教材・社会交流の場としての利用等のメリットがあり、今後も推進していくべきである。

しかし、芝生を維持管理していく上で三つの大きな課題があり、芝生化をする際の不安材料、阻害要因になっていることがわかった。

一つ目は芝生が消滅してしまうという問題で、管理用具の不備、利用頻度や利用人数が多いことが原因となっている。

二つ目は維持管理体制の問題である。校庭が芝生化された多くの学校において地域住民、学校利用団体、保護者、児童生徒、

教員による管理組織が設置されていることがわかった。このような組織で芝生を維持できている学校は多いが、特に教員へ負担が偏るという傾向にあり、これが芝生化の阻害要因になっている。

三つ目の課題は、芝生化によって不利益がある競技との兼ね合いである。大阪府の春木中学校の事例では、野球部・ソフトボール部の保護者と学校の間でトラブルがあった。

### 【考察】

学校によって気候、地質、利用時間、利用人数、予算など状況は異なる。芝生化する際にその学校の状況にあった芝生の種類、施工の手法を選択することで、芝生が消滅するリスクを減らすことができる。現在は鳥取方式や人工芝生化といったようなコスト削減や維持管理の手間の削減に特化した芝生化がある。これらをよく知った上で、条件に合致したものを選んでいく必要がある。

現在の地域住民、学校利用団体、保護者、児童生徒、教員による維持管理体制では、芝生を維持することができていても、教員が負担であると感じてしまう。この状況は芝生化の阻害要因となっているので改善しなければならない。地方自治体による専門家の派遣や、外部の業者のボランティアによって芝生の専門家による技術的アドバイスを取り入れることのできる学校が増えてきたが、そのほとんどがあくまでもアドバイザーという立場であり、管理を直接行っているわけではない。教員をはじめとする学校側の負担を軽減するためには、管理の一部を外部の専門業者に委託するという必要も必要になってくる。これからは利用者による組織に加え、専門業者による管理を加えていくことが必要ではないだろうか。

野球をはじめとする芝生化によって支障をきたす競技が利用する校庭では、まずは事前に説明と話し合いを行い、合意の上で進めることが必須であるが、この問題に関しては、野球やソフトボールを行なえるように内野部分を土として残すという方法が一番の解決策ではないかと考える。

それぞれの条件にあった芝生化で芝生の消滅を防ぐとともに野球団体等の利用者に支障をなくし、管理に携わる人が負担を感じないような維持管理体制を構築していくことができれば、地方自治体や学校の芝生化への関心が高まり、また不安もなく芝生化を行なうことができるようになり、芝生の校庭が普及していくだろう。